管見問答

前
後

特別
イ4
3163
69

管見問答

前後

これはあや原ちうふといへるもののかけるもの
いとしくおろかなるすぢしきをかきあつめは
りのまゝあらはしいとはいぢあつかれは一ところ
えけりてよぐりもくくおほしけるし
此原ちうふといはまのはるもえかきりし何もさぬ
あつかるりのく

貴
14
3163
69

管見問答序

大哉詠歌爲道也人心感物而動動而思無邪所以翫花嘯月者必有自然之八声而不能已焉人丸赤人貫之之爲聖助政化民其所感自無不正而其皆足以爲教于万世世降自保元王道寖以陵夷邪説暴行此道將没其後俊成定家之諸賢及出于世似昏々千日酔一朝須醒者然後関建武蒙塵邪説暴行此道亦將没頓阿生於其時 匡救 其弊人菌金革而遂廢不

講兵蓋天運循環無往不還　神祖伯天下
而四海昇平百有餘年于今繼絶興廢豪傑之
士四方雲如聚此道如日初升月將團赤井一貞
氏從于轍跡教導學者所以鑄人者可謂且能
務爲書成使予作序因辭而不許故裁綴鄙
言求錦上曝褌之笑耳

延享甲子十月

古林長喬謹識

管見問答自序

予祖父經山和尚は道に志厚く風觀而長雅に
多年親く交り去昔江戸兜心居士長孝隱士
代々嫡傳の相承奥合に決し給ひて傳を
傳へ又代々相續して予に傳へて此道を當時
の人も才と云ふ業をしらしめむ敦天下あれ
上執心の輩こゝの志ありて甚難きもあれは其織
まてとなり惟は世の人々に逆すれはいつとなく隱し
惟は此和哥の風敎をもて身を治るの心故中すに

時也ある時同志の人来りて此頃世にいふよみくせ
傳ある甚多し世にといへども傳ふる[illegible]よしとて
かくて達人のおしへに[illegible]服して[illegible]傳書を
傳へ来りし[illegible]
言へ[illegible]世に傳ふるのこしよろしからず人あるは
詞の[illegible]
好める人々の為に記すのみ

延享元甲子歳冬十月朔日　含章齋[illegible]

[illegible]文庫

然るに代々に三傳中古の説此集来ぬるよりかくのごとし
俊成卿基俊朝臣によりて此書を相傳し給ひにて和歌の
正統たり文治[illegible]二代の御門に御師範たりしかは
高く世の人に教へ給ひし[illegible]しよりて和歌の道も
しれ正風殊に深くして又より定家卿に傳へ
給ひし彼卿古今獨歩の先達にて二條家の正統
言に述て為家卿為氏卿より嫡々に相傳し給ふ
此家にて代々しるして異説多くおこりぬ頓阿
法師乱世なりといへども[illegible]後普光園攝政に[illegible]

ありて裏へ参らせたまひけ[illegible]に還し事申宗祇皆
傳し正統にしてまた事申歌道再興にしてしよ
二条家嫡流の教へ世に行はるかよに成しに数寄者よ
代々残猶く世の中さはかしくして上たる人も
好まれし人は穏ならされはよ秀才英士世上に
有ことゝいへとも其徳高将に行はれまたしあやまつりし
歌道も光かたかりしに此反に細川玄旨法印等
くらう世を楚ゆしくして野にかしく朝文武
抗に歌道の名を歌道の名を正年月にかし今
執しおつとり称名院三光院の二代の先達に

伝へある二條の正統残らず傳受し給ひし歌道は常にある
東照宮は神武の徳世に行はれ給ひ残賊の徒罪に
伏し奸佞の者是を改めて四の海波静に廃れたる
哉おこし絶たる家を継せ給ひ有職の道古に立帰り
公卿大名より士農工商にいたるまで皆其職にとて安ん
其業に勤む和歌は殊によくあらたに栄ゆるに
玄旨法印は正統の教業をもて世上に伝へ擬継まで
り猶さ二条家嫡流の風なをき尭孝伝へる越なる
又其傳来の文道伝へぬる人々必しもまた人の道正しく
が

好むは所（トヨロ）まで此三一偏にかゝる歌など此道を業とせん世の凡
俗となりぬれば詠歌の座をはなれて事はてしなくにも至
凡夫を拵みなし抑古をも学ばず俳諧の下流にも右のみ好む
習にもやうべき此出しも悪しきにや覚束なく
志深き詠歌の席に続けば世にもと人まで申しき狂歌
先達なりとも申しには議論をも仰するも或人の
言を書に学びて見まゝにまゝ有る事詠歌大概抄に師
師説の趣に背く類なども聞へども好み俳諧沙汰
く候ゝ傳ゝるにや

一 問云 先ゞ無心讃ハ傳らんにもなくて習得は難き書[illegible]

讃申難候を無ためや 答云 何事にやとおもはん
ありの御傳へは類集なれども其初心の人の申共
論成合所は書籍のやうに申候只類のやうに
ゆめゆめ申まじく[illegible]撰よりは師範に求めて
新しき事も好まず無詞を讃の詞とし此歌を世人に
あしきと申せと批判を受ける其の何ても讃
ことの外よろしく申よき[illegible]心詞つゞきも[illegible]
支地深く[illegible]申[illegible]通り[illegible]相傳
尤此師範の指南申[illegible]川東[illegible]三月二月

一　へりまハち撰ぶ云此新古今より歌ゆへ

一問云　歌ハ前代の説にて先学文以て奥儀
にや　藤原家に秘哥多く候まゝ　ひそかにや　答云　此径
云と云ハ物にならざる世間の好みに随て人のいふ詞皆寄
歌道ハよろしき方の好みの中に得て候ふ事たとへ何とも
如此初心の時もまつ傳へ首として　よしかゞよし　候かくと
云　勅撰　学　申して古記の様子文学にしよう思ふ中
是　中にも三ある道取との道ハ進一句よく学ひても世に有
よきと云ふよりも何し候ても傳受と候て
婉数一首　見ても其れがしハ家抄に取り

又此ほとの風躰世の好ミに随ふ人は雑談にも讃嘆の
種となる物也　是ぞ二条家正流の誤る所傳へし
好ましくて伝ふる歌道ハ末々新古今首々よみ侍る人は深く
古歌を学ひて誤しいだす事ありて其人一首をもよみ侍る人の心ハ其道
詠ましむ一首の作にも第一に柄ほそくしてと云ふハ世の人よき句なし体
合点のゆく歌物也　此の義芸術にも第一婉に理也とハ云ふ世の人は
甚しく心にうつしてよき経は大切に奥儀ありやなしやと甚しきに
以　けふの哥をよく家物にならぬ歌のわさはよく詞へだり歌甚理
も和歌にも字の数物を云なすも理をも云ふのよみたる道ざれ婉にすつかし

云ふべし通ずる時は一言二言にても通ずる人もあり是は
車理一躰といふ事もなく譲るのみ也しかしなから
心云ふ道ならぬは何とも風雅とはいはじ家なきにもあらず
志れ也句調をいひ合せ事を起してかはしり教
全く心といふを元の段にて表現の講釈をする事二ツ考ふ
乃譲る方は奥あり留書云ふ百人一首抄といふ物は能く是を
清陽四同題詠又講釈せる事も千古人は皆にて
段抄も出さる書は唐より大云ひて叓あり
哥は式にも首をとりて社を作る百詞花撰集云ふ事も
嫁ける心是始て思上事々にて思ふ事々は心まゝに言ふべし

家などは都ヘ二寺那道文（物）柳説也此一躰高きに
存っ居りしは是に於て党を見る事能師儀
也交始むる入りありし中山の道に
一 問云ふ是は初心の時は一向に分導も出来しがたく
前は教をよしとせば能く人の譲りは是よりと古今の心を
家の教へよく心後の留書は讃也を是と
一偏云ふ思ひ讃方後は此道の全教百首
よく心得る事は述て歌の讃目は空言
教へ連ね来る讃也其は新古今集

抑新古今よむしく云よう哉習ハてをのこ又たる杉首僧が
よう哉ふてよるハ行し又家出ん帰に無量歌也
きゝて定家卿も此歌定家卿詠哉とよめるハ歌し
御製ハ一首ゝゝみなる優なりとも捨ハさゝ殺に申ちる
べし古今集ハよし体にして撰置ては殺きハよしれ乃
新撰ハ新古今集より古今集の歌にて代思ふハ何も
通ずる歌也ハ師よにもて先歌にて別にも体ハ
りよ新撰ハよ其入まで地に姫よりて家隆卿もハ
かく云ふにも末一首とよまれ二の事り優なる歌
詠ずるとも体にて今是此母の歌卿に申後鳥羽院

又家隆卿北家とたゆゝに能其家に此様と云へ先行しれ
おもひ哉く拾遺ニ歩勅撰とも撰拾遺北家集よりし候姫也
家と思ふて勅撰此歌に三代集の歌又新古今新勅
撰ハ此遠ハぬとりて歌まで志深二ゝ世にけり
入るゝんと云ふもし人に撰者の姫ゝ今よりある
其後常に三代集おもん者ハ新勅撰又ハ草庵集求め
古今の田翁家卿ハ此風雅朝にてよミ歌とく
及ん其先風儀よも作らんと志ゝしハおめたゝ
よ家卿ハ其風儀に様ある事あり此入てよ候しべ御勅

にと和歌の冲ふかきを察し風雅又ハ三百余年の上にかけ此道を盛
にせられしか世之人今日の情偽世をはつし邪路に入る色し
新しく作遊之道は無我を本とすれはしも位は上すの
稀有故に崇重之有よく道は初心の下に無限を見
まても何と老能の傳之此故のことく古今人一首秀吟大略
ゐりし此紀貫之傳も又蕉庵集此中にも見し事
元禄に至りて観音院中にも其三玉抄の法をもとめさ故
三ちきの秀逸も出来一道に至り笠塚の種よりて道に
入る事もなりすして此翁の奥儀を立て文則此土に
こくる和歌の好み在あまりく伝ふる師説の教をうへし

和歌は此及からに甚むつかしといふへき自己の是識察明にあらハ一句に
流れをとめ之りと察の其入しも道を正しく師説を文は深
俳諧のことに存たることもあらは蕉風を俳に如の御之可是可慎
一 問云 和歌の上習を俳諧に用ひ候事有事にして如何捨がをく後悔候て
之習を信し今書物にも今師のみかへらされはや答云其
流に大概は無の記の狂ふて此後は和歌の教の大經大本といふ
和歌の詠吟の本儀ほとこそ世一般にも傳之あらぬ師の受容にハ
師匠より之を傳きり世本にも家の風にまかせ師の寄し
古今の伝ふなにと家々の説なとありしにとも世書に合まことを言ふ度し

是叔たりとも百人一首秀歌并古今伊勢物語並

古今は能く人に講釈抔せしむべし　詠歌大概　百人一首

伊勢物語此三書は此秘説に属し伝ふる事之深き秘事なる

事べし　抑是を見聞賢注せし有識の者人は心得たる撰の

家の秘文にて譲り有る事文段の限也　古今集とに伝ふ

べし　並も流しは伝へて勝けり　源氏物語も譲らず是風

流艶雅の歌也　此人のまゝにもべし　其外万葉集二十

一代集も姫家々此集又は譲らず此書物を秘蔵すべし

人あるべし　此様なる事は主意なし　然ども是を端と備り

邪道ならぬ物なれども　詠歌大概也　歌の本に非ず

是ならば人の心迄に秘蔵し此切紙を書き伝へ取るべし　斯し侍

から此家をば吾かしらば師説也　支文ニ而伝　文書ぞ伝へば

誤りし　二条家此正統の意味血脈也　尤も伝ふべし

一同云此事一首詠むるとも古今伝授の好んで持し[illegible]古今云

最初より伝ふる秘蔵の事を人々に異を立て人の面白げ

なん抔といひしなめになるべからず　此歌家を好み秘の事をは

譲おし世の中の様に譲るべしと秘蔵すべし　此歌の古の家

り此道の冥加にて秀逸も譲り　伝へるなる

家にも無き人の心也　正しく云ふ　邪念なく征伐[illegible]

ねハ部ツくなる外ゆかはかゝらへなる及ぶべき思慮よりは歌ハ
是實情を述ぶる所ハ邪氣をはらひ正しき心を發し
よくさ淺に撰せしに歌を詠ずべし一首ニても人を
助るがせ人に嚴もなかるべき道
一首詠みし人に觀ぜしむるに情を悔しくおもふべきなる
まよしらぬ惑き歌は僻べきやかたしけれ
詠出ものも一首にても悔しきおもひさるハ能し
扱文字せし處よりむつかしく傳へんにもあるべきがなき
むかしの朝廷の公家衆は歌を志せし(世)時は世に
おもむき給ふ其處のやらぬ是則此之様和歌の

扨も神國此道ハしといふ神世より傳りて世ニ和歌と云ふハ天下
隠ろへ大臣より凡和歌は上に卿も用ひて出來けれ
まかり歌詠ミいふハ付ても卿といふハ上ハ人より下ハ民迄
至る迄後此職とも大切なりといへる勤めてなし
仁義忠孝の本を學び真實にしといへる敬ひて禮儀を守る和
歌の道にしといへる道具和歌は此道を用ゆといへるを
深く思ひて歌の道を守りしを世の人も學ぶといへるもの也化育
古へより治世の今に至る迄景氣山海の形情人の心を言ひ世に
盛衰有職の内圓かなる風情とも述べまほしく此皆是に

用ゆるや皆人の善悪用は觸るゝにたゝしかんと無也

いふは和らぐも神代の人世は世の数多あれど云ふよりなき也

左ればこそ進んで家に有職を定め武士を武は左ば

私ましき農工商は従て其家に其産業をなして

おしへ云ふ道を執りて左を仰ぐ物はなほ久

此儀は家業にしてすべて家人に准ずべし前代の尊師

の或人へ申す[illegible]作る形も数多敬戒し

情ある道を深くさし能く傳ふ

へ記してしかも人へ一々傳へ散乱[illegible]職分云

いふまでもあれば深く学ぶべし[illegible]問ひ

敬すべき也[illegible]聖と天地に云ふ神乃

冥慮みとかろうしては恐ろしき也

一 問云悪は其義に悪し或云此本源は祝詞にて悪は

如何なる文字を祓ふ意は如何に清浄なるべき也

極め其に穢れを祓ひて傳ふ意を云ふ文字にて知れ

神国は左の如く人の身や其清浄にて穢し地の

云ふ事一二字の[illegible]神にて風は也處

云は云ふ人の祠に二字を天の浮橋に下りた神も

神のおき渡りて天は清浄[illegible]

清詞ある趣を三十一字の文字に数定て而後猶子の綱
云ふなりされば素盞烏尊の八雲の神詠も妻を迎へ給ふ祝
本源之時先是恋の無情之祝言なれば歌よむ所なりとは是也
まことに恋といふ上ふべし上をいへ迎へぬは佛者なども
くるの教儒者の教ならびにもとより恋をさとしたまひ好色
に操をとらぬいひて淫の事をいふて教じ偏屈なる人々より
ハ情と育へし作物の物取源氏物語のさへは好色の書なりと
せりとなんおもひ人に我もみなまた見きに恨をなかく
批判しその意を見し道を能く儒者も見ことをのり
小野篁菅家僧正遍照慈鎮和尚なども以て数へ

故にとかく恋の哥は祝言にも類し故戒なとも好哥に能ありとも
いへるなれ恋といふものは方事の物の根底にして恋と
此恋の情なくしては天地の化育もおこなはれまじきなり恋は
情なれば好色の一偏に心をかたよらさず心を清く保ちて好色は
深切の情にして誠ありて人の哀情をしるの仁愛の端なれ
天地の交自然感通して有論之夫婦の序有君子父子の三事
人倫の交はみな恋の情に根ざし成ものの批判あらん
故に恋のかなしさは歌に唱へられしは恋の情をよむ人の
作を揚げし道の教の根源と知るべからず成ること但し恋の

書しはせ感ずることなきは是歌の本情なり姿
歌は本情より則人情之臣たる君に忠なるをし君に
臣は子ゝ子と親に孝なるをし親たる子をはいつく
しむ是等の情は皆恩愛らうむる歌の本
情を体し又歌の本情なり道は誠なり覚ある道べ
忠なるも治偽を離れ物の言の所を知り兄弟の情
絡る情の道は君臣よりをむし又一首らし哥も其情分
情動らり哥よりも天地を動し鬼神も感ぜしむる
人情の難きを和らぐる夫婦の中も和らぐ古今に皆和歌の
まれしいつの世にも偽絡の情にはあらず感動せしむるの心に

悦しむべき才は実の有る事を言ふ也べし情むへし
此是らし言書歌の詞を悦ししめは人の言葉を情に悦
誠切なる気を知るを道文の飾に言の上の詞つる歌を
風雅雅流儀に依る詞を更文を代々の撰集に
彩し此集はも悲の言教ゆる道文ある古今集雲霧
景物も詞を之をして此言葉に其心を失光彩は千
言辞を見る者はより物感で伝し言語に如
稚下し和道に於て詠じ万を心道有る歌の詞を
有道は悦し心の情を知らし物たるを此の道に勧める

迄七句あるにハ百韻の内に情緒連二所情付と云首尾の分
此事ハ連歌其一好し何よりも歌ども照らす言葉に数多
らし候本情と云連歌何にも風情識深又作意
動向ハ句の姿よく本意とすべし何ても好ましく
傳の請句の上置かれの連歌口傳有本情の所然る故
すへしにも此方をよく談合べし此古傳をあてにせ
数寄者の捨のなき事こそ此人々に分ちよきがた道
其本分此句ハ秘蔵也其外題にてハ是ハ
皆其類其様の贈答の類に出でよし人々
更に其人此作り世によらず人ハ是為に

伊勢物語源氏物語を見て歌を詠み習ふべし伊勢物語源氏
物語ハ好色の本情よりおこつて和歌の道人の教也相傳
ありかハ古今集を見て是等を恋の句をハ裏の説有て
放埒ならぬ句をすへし考べし

一同云識と傳ふるハ春の日の長
閑きの景気などをも詠ずるに鶯をも詠ずる也秋の夜
北国の冬其景色の夜の霜を春の夜を文に詠ずべし
句の詞にてハいかにも山家山海の名所の景気を句に詠む
其まま了又心の底の題を撰び寄情の傳ふ

にほひやさしき人は此恋に今此世に生て百歳に満
人は常なることを詠し能く言つたふるを好とす
ふ無窮の様に[illegible]採取は白雲の紫
錦に似たる様なる題號備へるやうには好む心なるか岩や
古事には様々の情をもつにや答云花に鳥を和して
銀河のさえかゝる所の好道は道に通ふことを[illegible]成る
云尤にはたゞ我一生の事と好むまじき業は其言に
其題にも此変化を自在の中に述べし 其のりに表
それ其題の中にも其恋其のりに其恋も題の題をよく
にうるほひやうかに好むべく遊山の景観を求むるをよ

よしなし事に是非の情を題にしてことに我々に
はしめて昔に此をして宿切にて幼少のものに
一通りは某信にて此中に風雅の其題に言物に好みたまへる
よしなしことを題の文字にとりて小其言は二字に成る様に
其日好む事を題の言物や題に記し篇此に家に歌集
梅の題は文に而 杖の何の筋に候ふ 物にも事は懐之春は其の日に
秋の句をよしとして此によりてしは風雅は備のある
又其の題の題の道は題に対し而已 言情を又備にして
此に又其雑の題に是 四季の上にて又ことは[illegible]

当季或ハ雑にも作者の一作にまかせて先偏
にしたる証拠之云ものならず文字の上にもたとへ人
ハ居士の言ふものにても題をたてゝ其題の意に遊ぶ（たとふ）
中にも偏に作者の偏に題の意の詞も又文字の趣向
又ハ其題の意をよくわきまへて其偏の作意
諸偏の詞ハ近くして遠きなり 然るに人の
附句に薪をおもひて是を其人ごとに作りたき
此も中にも偏の題の意を述べし 是ハ其季の
心得也 之薪やまきとも云て猶も折句を
にて遊ぶ詠ありて 此虫の作とこそよからめ

題を書ぬかくしの名人ハ雅人一概に云べからず 唐土
能みえたり 嶮山嶺の事にて薪やまきといふに偏
迷ひ薪でおもひいちず 意之是とも未熟ゆへ也
何揃ハ此人も探題し 此人の事也にて古偏の詞
もる迷信山のかけくて偏あらず云々中に 此の其事
不老延年のしるし古偏の詞に偏有其偽なくてしも板
人生七十古来稀なりと古人詩に作りて云
万歳と祝ふ人も世に千代やとも好む
追従軽薄の中にも其の中に偏此事じよりもう見る侍るなり

迷悟ハ只人情ト云物ニ甚人情ニ随フハ迷道也
人情ト云ハ離レカタキ所ノ放逸ニシテ文字モ用ス千年
万年生キ度ト思フ事モ人ニ於テ替ル事有ル間敷也
生ル事ヲ好ミ死ヲ悪ムハ何レモ人トシテ貴賤ニ
替リナシ　迷人ハ此等人情ニ従テ
云ナラハシテ世俗ハ只人ノ欲ヲ好ム所ノ礼儀
敬ヲ行ヒ是ヲ治メ禅僧ヲ誹リ偏ニ情ヲ云
ク世ノ中ニ迷フ事無キト云ハ放逸ナル是非愛
欲ノ礼儀モ無ク成ル畢竟禽獣草木ニ異ナル
所ナシ　是ヲ為ス者ト云ハ悪愛ハ人ニ非ス親ニ道モ無キ

萬事ニ其心ヲ空ク成シテ唯実相ヲ悟ルヲ悟リト云ナリヤ
悟迷ト云ハ境ヲ離レテ万事万物ニ霊ヨリ出テ地ト徳ヲ同
シテ其人ノ如キ事モ無キ也　其中ニ於テ悟ルト云ハ聖人
所好ノ悟ト云ハ此モ又迷ノ情ニ背キ来ルハ人情
皆世界ヲ離レスシテ只人情ヲ学ヒ
夜昼ニ修道ニ情ヲ積ミ無功ニ悟リテ迷ヒ
生レハ神明之仏性之聖人之夜ニ生ス此有レト
人ハ云モ有所ナキ故ニ人ハ此世ヲ行ニ道ニ在
シテ其身ヲ宝トシ其事ヲ好ミ情ヲ好ミ行フ

はかりの差くらべて此趣を覚ゆれば此趣無かるべし
又は仁義忠孝を習ひても此趣を知らねば人倫にあらず
立ずとも是ぞ天地の徳と云ば云程に和合は本体也
天地も明也合 鬼神も感ぜしめ人情をやはらげ
つ此事金気至剛なりといへども卑賤なるの功の事なれば
に筆を取て字を書ての文字の稽古といへども人の本情を
しらぬは甚だ憂しいふ事也此和の和の扁を云事よりも
世間の名の為に大和の風体を云て和合の和の字を示
らく又文は言葉の綺なりといへば風大切の稽
法の徳あり傳文は文無し 是道の誤也と云へ然

おもふ所あしくば毫も俳諧の二字を捨て切に稽古して識と
云ふは只正直と云ふ事なり又其品々の理を近くしれとは
風雅と云ふ物をすなはち云ふ事也其風雅と云ふは
よく云事見分けば此風雅の言を正直の元なるや
しかれば俳諧は人情に随ふ本情を知る事と云ふ
是非ずの風体を知り風雅を見分けよ云ふ事利用也と
風体の本情に孔子の言葉なりの攘し筆にする人の内に
よくおもふべし

一 問云 是しば誹諧は臨機にして其志を述べ候 師も今は上の

人法度掟式にいろいろ有り 又法度掟ハ有るへき様ハ
以前より積りても今の世に至る 上古ハ法度もなく師もなく
答云いつの世にも人情より法度起る者也 [illegible]
法度掟式の出る事ハ末世の人の心悪しく世の中悪しきハ
云何 [illegible] 世の中を立直さんため [illegible] 家を修
神代の昔より人情の有る事也 [illegible] 此故に云ふ如く
有る事なれど末世ハ人の調ひ悪しき故に [illegible] 人ハ法度によつて法度立
掟式と云もの也 正道を立 [illegible] と云ふ [illegible]
しかるに高職上下の分乱れ [illegible] 人
正直なる法度も世の悪しきに変じて [illegible] 此掟の有り

人たる者仁義を守り其罪科遁る事なし [illegible]
掟なきもの也 是法度の事也 此法度 [illegible]
法度掟式此出来 [illegible] 此法度数々定て既に
法度掟式定り [illegible] 其掟もなし [illegible]
云ふ [illegible] 此掟成る事 [illegible] 此法度之二條 [illegible]
儒道學の人々は情を教え [illegible] 順 [illegible]
守る事と云ふ [illegible] 神道 [illegible] 此法 [illegible]
大概此法 [illegible] 道と云 神道 [illegible]
道 [illegible] 古 [illegible]

世にあり修学なく教を以人ニ生れなから悟道を開ものあり
義なく[illegible]悟道を受[illegible]して打撰集
せしに従ても代々釈教を志したる悟道せし異国の
教といへとも世間の事をも云ひ仏道に通するもの有
かくのことくハ今の経典仏法の徒にのみ[illegible]や 又師より入る処
ともかくも是は縁覚の様にして手本無師独悟といふ
一句によりて豁然と起りて悟る者となる也 是自然
修するに習読誦を於て先達に着き今日の世先達ハ
師匠を求めて伝受せよといふハ是も人を勝[illegible]から
また和合の道ハ教に習ふ事なし 只道を求る人の

生れなからにして世にうまれ出て衆人に秀てたり 此故に
教導の人ハ善悪によりて善ともなり悪にも成也
性ハ善なれとも進むに従て是を捨るにもあらす 性の善を守て
其所しも難き教を導く人 何によりて是を得んや
始より是を知るハ師匠の導き 一向開眼悟道を
はしめより[illegible]にして仏の正路斯にして無道を説
捨て悟るものハ[illegible]成る故 其家を捨る者ハ師に教
相応のもの見えす 世にある人ハ是家居
此聖教を学ひ何にして道を流布し大概に[illegible]人[illegible]

返歌道成寺の事　同返し

一　同之節の詞ハ其程成千万なくいふ浅めあかなく作
りや文詞を述たしく是へ来情を手にまかせようよう作り其也
各其節の気を述雅此是のよしなら成かしけらしき
かしせ作る事中ゆるしそあるへし其後しらく作生
作道是なら其所の成音の流めしと道ハ一首くだけそ
曲ちかし来情なき其節の詞を述て艶し二度来情
飾行しみ此則しなる艶計もやうつゞ[illegible]
上よ此く[illegible]艶しよするの初め心艶の詞
かしけれよし未付詞の作道を申情なし一の外を申す

去ゆれ卸と其所定もかしそ都らぬ[illegible]
よらんと[illegible]へしかれとも[illegible]はまた
すそれ其中にいはしへし[illegible]
是迄の式なも一雅なら[illegible]節へし
其用らしき艶述[illegible]あるよう
来情あるへし[illegible]
つ[illegible]かよし[illegible]其節の古今集の序
よ作る古今此[illegible]
皆其心此節の中々道を述此一雅[illegible]
九

ろあり候しんの道のしんだ

一 同云 茶の湯ニ云物なきはなきも茶の湯茶入合せ連ば
ぬれたる事で候 此一つ茶の湯茶入合せたるに
有り以下の茶の湯茶入合すと云へ記ぞや答云 茶
の湯茶入と云ふ物は大切なる物也 茶の湯茶入は傳へ事を
の秘傳なき者は是茶の湯茶入の傳も有やも知る人と
申ても見事に候物は多く又茶の湯也ても事也る
御茶入に候は一つも茶の事は茶の湯茶入はなる
茶入に持て御茶入の物の茶の湯茶入の外にしくと
あり文の茶の湯を成茶道事前の茶の湯茶入の一義に

秘事口傳を以て候しま道候ぞ其傳事道は御とかたくば
茶の湯と云物は道云ひ事は一事傳受して其才
覺悟あるまじく無事をあんじ物の目利茶の湯に事
流の有る茶の道の人の能き味ひの道に悟れ茶情も也
べし 秘傳を揃へ有ると也 茶之やうにからんとまね
あるまじ 能ある道の事をしるゆへ
あつけくやうにてならんと致す事の出来ずとし
此道を聞く入る道は茶の湯の事は明師に
また事を入れしべし 此の道は茶の湯の事ぞ一言此
前説

すゑならて中御門人合點して上中下の事を此二つ其言
言尾蒙（られ）ば其代に添て合點の事成るに宜言
かく數も[illegible]習ひ捨（は）今に稽古の傳へ[illegible]
覚えたらば一言の中に筆を入れ合點の仕たし
道の記習ひの仕置法式に随ふ道を仕當てたる
皆俳諧にて是を初心の人も一字の言に此
殊に自己の工夫を以てして志は此學ぶ人を筆に傳
し給ふべし

一問云詞は此所にて作者の心得[illegible]答云詞
然よりは有たる道に作法一字二字抹消其品の事

其道もとより俳諧の師として學ぶべきにして其所は
は世話詞にて此詞と世話詞との取合茶の道を
制の詞を先達の様に是此詞を世話に新しく作る
世風躰によし此風躰にて此詞に批判して其上
にて工夫すべし一向自己の分別にて協ふ道
此詞此所を作者の心得べし一向此詞の一字
也又先達の法にて作法は何にも此詞を一字此
仕方に先達にても此所を一字此人の
手見えたり然よりは作るべし先達の

御法ハ新道をもつて四病并に剣林にて四病の障を除く
べし 道ハ越え物よりおもふ極意なれども何ぞ此意を悟ると
なり 節調あるべし 是此風俗により秘すべし 御極意
秘し弁才老若悟りて守るべしよく証拠なり

一 問云 昔より御法をもつて病あらば以て四病停止人なくや
答云 病ありといへども老婆式に善悪を記し御道の徳によく
見へ人〳〵 此極意に初めの御所ゟ外になるよふにて何れ也
一こゝより見て其物とこゝろえの事もの〳〵薬師にまかせ尊
是くもなし 早免病と云ふ嫌たる何にもあらし
何 此部を皆病を治之法ある何ぞ合透道にして

病あり御法あり 今論病にハ此分の者逃にハあらず人へ一つ
名分と御法の外ある外に病の外ある分にゆる迷を名分にたるなり
よし無病をも掩かくしたる世に勝れ斎をもなる無益
斎ありとて是を立て置て勝れ所をも守る事命にも害あり
りとも其今此分を全めて首きれ御之儀を修る事の修行
ほりしのあ分に病をへ何とても宣して薬などのひの也
語るもあるゆへに我をふるひはのをあるにはらしく迷
彼是風早粗熱なことになるは是悦びあるも者此邪説にまよふ事
ものゝ才も御さまうへし先哲の遺訓などをむねとす迷の極

ともかく家作者の難よりしかも当家の難なかるべし

一向宗門徒の嫌ふ所の新古の差別あるは先古様にやあらん

嫌ふ所のわかちもなく新古とも其角作の如くなるや　答云

道理は是亦なるほど述べたり　諸家古様の拘はり無

御詠も其家にとゞまり古きも手本の一文字

二文字なりとも嫌ふべし　又新古とも好めど世俗

或者の説に近代俳諧の変りたるよりの了簡を知るべし

疑ふ処の書物なれど是迄はしるべし　見るに一奇

手に取り見るに御法の好むも此道は世に広まりける

又はすたりぬる也　新古とも其作者の心なり好むの

其代の俳諧の人の心を誉めたるまでは日本にも汎く白しといへども

其時世にも及ばずといへども何処にても新しく求め

たるのみ好みて三つに限りて微に二つ三つ余情のかぎりを好く

四艶の詞すなはち初心の浄切の数情之を見る世に流れ

新古の初めは五文字なりて能者べし名句の遂ぐ

初心の者は宗作者の新旧の事に老いて未然の傳に

人毎に此道の本意を知る者の高名の新作とも作者

此新古の有無を知る人ぞ当世の風躰たるべし　世に高く

御前に望みて文の詞のかぎりをいふ　此道に於て肴の談じ

みなりぬるやうなる人は先古き藤原に従ひて詠むべし志に
心得侍りて誠に無来る侍るは首の優しく侍る人の詞は
朝夕に言ふ詞なれども新しき歌ならずは此鹿に
此集玉なる事へし文に為時此人やことなきは思ふ人の
手ならぬ言葉に万里此の常に[illegible]切
古今の[illegible]風[illegible]侍る
人も能[illegible]人[illegible]
此河[illegible]詞[illegible]
正風[illegible]左[illegible]
君[illegible]詞[illegible]定家

しこともなりて見せん人に感[illegible]世の[illegible]
習ふ[illegible]代よ[illegible]梅[illegible]人は
為[illegible]八千金[illegible]良薬[illegible]
後撰集恋部に

日ぐらしに物思ふ[illegible]かなし[illegible]
けなる[illegible]いへるは[illegible]又世間[illegible]
ぬ歌は宝治百首此内二十五番山花

左　経朝朝臣

吉野山花のさかり[illegible]雲居より立ちて

右　　沙弥禅信

櫻花かつちるかたは白雲のたえまにみゆる山の風
左の歌人丸の月よ[illegible]の歌の心にかよひ侍る今此世は
及ぶ人こそ侍らめ又左まさる[illegible]かたはらいたくめてたく侍るなるを
遠山の[illegible]白雲に侍る右の花は山の桜[illegible]まさりてと
類なきなれはいかに侍るにも白雲のおしむ心とよそふ物を
わたりぬる身の人の心は侍れは右の方為勝
わかしく方々二十番　社頭祝　定雅卿
神垣の高きうしろの御恵みもまさるこの世に神の世から
左はなき歌の心に侍るか社頭の祝の題に真榊
ゆふしで榊の枝にそへたる歌を思ふ葛城の神しを
こそ思ひ知り侍れやまとの神を御世につたへぬる
めくみせるよりも末の世の隠れたる人のこゝろを知る歟
此右歌は続拾遺に入し又百廿六番

師継

神風やみもすそ川の橘は実をこそ此御代の花とは知れ
世に続古今に入し右は歌合の判者為家卿の時[illegible]
侍るに付ても御歌の道よりかくなるかぎりは此番ならし
[illegible]歌合の常也

ある[illegible]ありし　陳言番[illegible]答ふへくもあらす

三くも色[illegible]番[illegible]云人々云[illegible]連歌能く[illegible]傳し[illegible]

御連歌[illegible]得早初心何事しも甚代其宗匠と仰にて是

語る人其敬ふ云ふ[illegible]社寺其[illegible]傳也

管見問答　下

一　問云名高き連歌といふはその[illegible]何[illegible]にや侍る答云

名有と云る連歌は[illegible]

[illegible]名高き[illegible]宗匠と[illegible]

いつの世まても友ハ[illegible]好し[illegible]事中流ね

おもしろに面白きも[illegible]思ひ出る一方[illegible]

趣意[illegible]意ありて作る[illegible]その句の[illegible]

久しく称し[illegible]中[illegible]おもふへき[illegible]

者也天地神明の徳を合て思慮の及ふへきにあらす

み飛鳥井逍遥とのいへるの何まさる論はすゆるまし
逍遥一名は力ありけれと作者の粉骨たに有けれ遣ひ
下はいつしまの曲節もいはぬ逍遥の粉熟んの余人
あるはいつは遠ほかり給ふ見るにしもいつかれ遣ひ
の論未た出すは厚き真かあるへき猶あるへき
寺かくへは
あしひきの山鳥の尾のしたり尾の長々し夜をひとりかもねん
田子の浦にうちいてれは白妙のふしの高ねに雪ふりて
桜ちる木の下風はさむからて空にしられぬ雪そふりける
春たつといふはかりにやみ吉野の山も霞て今朝はみゆらん

蓬生や [illegible]
一ゝ [illegible] 人は [illegible]
逍遥 [illegible] 伝へ侍りし [illegible]
[illegible] 二十八代 [illegible]
[illegible] 桜の [illegible]
[illegible]
小倉山 [illegible] 朝 [illegible]
[illegible]
逍遥や逍遥とやけむ [illegible] 類聚 [illegible]
卅さの集 [illegible] 道の綱 [illegible]

はくしれまするに難儀なるべし　初學御智者偏りんにて
さて人見ざる日にいつしんたとへば天地の広大なる
ゑびらし高遠は名山大川の巍々蕩々たるがごとく
なりけり

一同云諸藝の大概は堪能といふ先達といふ事甚だ別にて
こまや代るに答云諸藝共に大概の輙きは学ぶて堪能といふは
道に能熟して巧用と達者と兼たるが堪能なり　巧用
なく達者とばかりいへるは道の傳受能くして世の宗匠となる
人が先達なり　首より堪能なるを先達なりといへ人もあり
先達と堪能なるを堪能なりといふ人もさなくして有る巧用達者と

兼たる也　左の傳受もなくしたる人にあらず堪能の先達と
言つ但し此世上の人は醫學をばさまでせずとも病に家に入
にて病症を考へ薬の用ひやうを揺て妙かにて
死证活しけ療治能記しにて療治の上手なる也医師
此堪能なりやといふ但し素問難経より始十部の医
書を學び其の深き道をさくして
元人病名も入らず病を療し薬を用ゆる其學
なければ下手なる人を名づけて醫者の先達といふ
堪能といふは右の教をよく
相成て巧用あり達としてもなき道の及

けふまでも伝へたる此歌は秀逸にて心も詞も続け

初めより折にふれて秀逸なる事甚才にして秀逸なる心詞続け様に

そしられ侍るものから秀歌とも讃むべき節の侍るべきを

桜郡秀才の人なりしかば同じくも言と詞の道達して後世の手本

なれば歌の趣吏のよしにも学びて人を教へ今も似せ

まことに人代々の風体を知りてこそ其の道を達し上世にも

相伝して其道の事をも知り正風体を伝ふる人の学び

ひとり人の為に道達者の名を残して秀逸の一首を

世々にのこる也しかるに其道にも入れ初めて歌を撰び

なし古人は其こしらへても慶朝臣は此頃の先達

なま道有名句秀逸といふ事は一身の人信親朝臣は

かくて千載の時も交りて何事なくも秀逸ならずして女の

隠岐に世の手本となる西行法師と家隆卿などは世に名を得て堪

能なる道ある正風体より成就し其後世に能くゆきわたりて

撰達は其道の学文はなれ侍れども秀逸の所多し顕昭

は博えて博識の人なれど秀逸は所々多くもなし隠岐の

先達は人の上に立たず上古は和歌の道の先へ俊成卿定家卿

為家卿は三代の宗匠なりと謂はれて鹿を続けなれども

更に後世に説は見えて定めて人丸の勅撰をは

上可数堤体の先達其名あり一句師説は伝授

一　問云点削ハいかなる故起ありてや　答云点削ハいかにも大切なる事にて

秘伝口決の事に候又ハ其道に相伝の器を撰て家の好悪

をも住せず年月日を重ね数年を経て後に其器を見定め

点削を免ずる人ハ其人ハ器量ありて　勅許

いまゝ人点削を免ぜぬ　勅許有之事也さて天下の

宗匠の家道より　御判形を以て点削して

称号ありて其人ハ謙退して返事を

代々の世提ありて一流の宗匠を仰ぎ代々

よしありて其人ハ是非を悉く

や其方に謙退して代々伝る世提ありて一流の宗匠を

人をも免さぬ事ハいかなる数奇の人にても宗匠ハかたく免じて是を許さず

其器を得たるにや其方を謙退して後にもその人を

当時の人あまた億万人の中数を又并伝受有之宗匠の点

削ハ伝受なくてハかなへぬ事也七夕の

かなふまじき極秘伝の事なれ共人此方ニ点削を免じ

無伝受ハ決て伝授されず一首よりも宗匠の

いはれも老ゆる是かとの御ゆる

一　問云和歌ニ三神とは住吉玉津嶋人丸是なり

通候人丸赤人なと伝の伝もって正説あらく何のゆへにや

答云此三神ハ極信ある大切の秘伝あらく伝々にて口伝

術を修行し年月を重ね執心の篤實成もの有之におゐて
亦或ハ弟子傳受して後ニ堅固にして其上此道を
なすへき事ハ人の病を補ひなとする人ハまたやゝ一つにたつ
物ニ其者ニ非ず執心の好所ハ人をも見へ遂ニ其物みな也
傳受して後ハ錦つなし身の其道ニ打込て頼ハ無之
數ニ在りて方向慢して人ハ人をもとめ人ハ其まゝ
此流儀其上三嶋宗不ハ傳振なくおもひつて居る
者留て振の其秘訓のうちに傳へ其道ハ其身ニ御座
或ハ己か為ニ無きも其身に呈する事傳受して其ノ振を
人より慢する事年月ニ依て相傳して其位ハ其の

御かと成て其筋に能見て其味を味ひ給ハヽ流儀の奥義家秘密これ
此者年に秘決を又ハ右ニ應じて流儀ニ成たる時ハ其向へ付ける
無益に此のみ云ふて置て能し其度に隨ひ方にて成
深切に成行向ひて好み學ひの詳深意を記す也

一　同じ歌ハ感氣之事能得たる人に秘傳の事ハ感氣の
行ひの優なる事ハ寢てもさめても是非遂好まれ居まゝ行く事にや
傳の答に感ハ身ハ寂滅にして感を起し秘事も見を如此盡し感み
是非なる時にハ隱されたる秘事の一ツに累氣さへ能聞ゆ盡くハ
有難き感あるこそ文道深くかゝるまても感ハあら事有
是ぞ言ふ此秘決傳ゆえ是ぞ所也秘する一切希感號

能句せんとて句にする所は風情を求め無て定めなき化勧したる
やうに心得ねは変る感氣なくしては我のミを以て探て
実情なく都而有情を感氣を求め出しくり出す感
氣なるへし

一 問云貴翁の詞に云俳諧は常に心を中にしてなきやうにすると云古法師
も宮にも好み古文躰にして自然に作る者也や答云此趣は詠
歌人の嗜よく拵出しゝ得伝へ之へし常に心中に留りて
および紀貫之も高きに乗りて其紀に取て和歌も道を神人の
時にも風雅の伝なれは一生あれは随分の道は風雅の
何をかは差とかくはそ撰集にも入へきほとの事へ入るへくの句也上

みよしの紀俳諧者可勤恍惚の先達とも素前にて完し鍛錬て
其一句にても甚深の口傳にして文の用体明らかに来記すところの道者
風雅の人の事ともに新古に能くとも勤候て可入一句も
常に心を尽し云ひ出したる所は一面近き者は俳諧の手本を尽くしたる
へし一冊にして被御出候人へ好んで作り出すもの
深切に覚候の大切に信しよ後世の人
誹の其後にも爰に被伝日本の其道もよく伝へ

一 問云誹諧の作意の心得には子細有れはこそや答云先前後
ながらの事なるへし 四季雑と云には有るの代には
撰集に似たる類にはあらすして見計ふへし 又一の題は本心有は花

究りし物也のしらぬ事を書所ハ一篇にも新字作者の
新地出生して作者家をとらへ入たる曲節分字を書て
出来し芸人ハ人と對し寄物作者の作法のくせ
只しかるを我ぞれと以て伝へるを以ちんに
いや作しにても有ばへしん芸歌にもハ前へ是らるやハ
其作者の其人は思ふ故新形に更文字格を云ハ今迄にても
又かくも在其形をしやと申出来人芸は花の禮義も
雑話もそのつゞく事ハ只我が力と入て接しかし事
よくある事なれとも一曲のうちにいふさらへ文字を作りあまり
ある題の思さ是へ文字只ちにつかハしくも備ふ説

一書をしてある作者にて曲節にも作者ありし説を
世の掟を出し新に存して偏退する事なかれ事で
作者もしも本に謙退の心なく我を数多むさぼるを出す
有るべし

一同云句ハ初五文字に於て添へなとかハいへど作を為すべき中や
巻云五句めし二句として二句目に作るとす文字を
作り添ふ初の五文字ハ一文字は偏立て作ると随ふ大切に
古き上の作を用ふ五文字を作り用る是より傳来此説也
二句より作新出来し入れし所を初五文字を添ふ新古の
けやき子よ調五文字にしても続けし其作例を考へ宜し

初五文字に君臣の事を詠ず傳受と称すべし

一 同云述懐の所詮はいかにも傳受ありや答云
此は五文字にて有とも此義は深き傳受なり極述
懐と云題は別に傳受ありて述懐には[illegible]書文字
にも此等は皆述懐之事を離哀傷祝言
その事との物思ひをあらはし中に此悪[illegible]云[illegible]
されば皆述懐のみならず云[illegible]言葉に極秘傳之
去れ述懐の題にても云ふに逢はず其[illegible]不[illegible]よし
かれ又哀[illegible]其物を見知[illegible]熱[illegible]
有べからず述懐の品はよく艶に遠し 俊成卿の旨を

守て[illegible]事肝要也

一 同云釈教の歌も人情の外なれば云べき人かは秘傳
なり其道には[illegible]是非読てや答云歌は
人情より出て[illegible]弱[illegible]以て秘すべし[illegible]道に
在て[illegible]秘事[illegible]口の教にて[illegible]傳[illegible]
云[illegible]述事秘傳の道[illegible]口傳[illegible]
[illegible]道[illegible]明白[illegible]
[illegible]秘傳[illegible]
[illegible]目繋[illegible]
[illegible]信[illegible]秘傳[illegible]口傳[illegible]

道徳大切をまもる人ハ此学力すくなくとも
者ハ命をもて千万代の世を相伝の道ハ実ハ邪路な
るへし

一問云會席作法ハいかゝ候や　答云會席ハ
法式ハ公事の所ハ宗匠家の會席ハ法式ハ守
我と朋の家なと寄合ハ法式なくてもへつらハす
気色をもゆるさ以ハて懐紙天人の筆の上流し
まゝの座敷法度も張る無用なる事の
すれ共は常ニ同座の人も心得て可然事
傳本此書秘蔵人ハ師傳ニ可申會席此口移ニて

ニ病一興成りし歌をよましとも云つゝも是式とも
もなし　問是は人々歌合の寄合の席にて無二意
不敬の事無し恨ミ有れとも是見ル事の漏
あるへからす事なし

一問云名宿此會式の次第を細にて何ひ候や　答云師
云然も無し道度せり傳をかり名所ハ宗匠精進
訂らしにて其調法ぬ様事の作も追起なるへし人の口に
事終要なし法式名所る書道也へしまう
用し類は皆二首よりと游草書等にも作
二をたつ家代清命をつめ三度念の事此字是の

題ありて述懐の歌しも作る事ハいもの一字題なとの字
數よ二首なとよりし聞えし和歌所にてハ直に松浦明石の
浦なとかくしても山なと浦の月なとゝ云ふ題あらハ
歌のいりたる方も傍題を迄七首なとよみて後を
一首を名所にて詠む（此題にはよめり又は名所歌返を
詠みす也又ハ十首は二首わら又ハ五十首まておよそ程
名所なとも合せてよむ事ハ二三首にはならされ好まるゝ也
名所ハ二十一代集に出たる名所を用捨（[illegible]
作りし道ハ傳受をとなる事の歌題あらハ続あまる時ハ
其角なとのたしなむ事ハ歌心にはよく似合ない

誰しも若（一首よりも）此之文字の題よりも雑和歌所の題
文字あるを抄物にも難しといへるハ題を（一しも上方野山
和歌浦山城桂一明石浦なとゝ名所の題にて詠らせ
是ハ常の事なりとかゝせられし

一問云はしめの序我等ハ云ふ程ハ候ハいかゝ答云王羅
ろ物ちからにて日ハ法秘傳候ひしたと（傳受文章）御座也ハ
近之初心の者よりも見ハいつも最初の事ハ
よまれぬと見え候ハ御心得ハ廿二首にても限りハ御座候
ごん殿に是ハ云々五文字是ハ御傳受の
上まわるは無文よりも作りまし候ハ御傳受なり

てを情にかなふへしとかきたまへり

一同ニ當時の歌も見え貴家の風道を世中に流行し給ふ事なとの
二ツなり諸侯方抔にてもなけれは行ふもの也爰ニ不審
けすのそれより行ふ事甚しく不審也とていへはそのうへ
謡斎なとは堂上の風世下の流にあらす今はおもんはかりて叡
慮の流人なと行人とも子孫にてすゝみ給ふかほとの先賢の人情
にそむかさる理あるへしといへとも世の人おほくはゆするを
後に見えて歌よむ人の智たりとも多くはあるへくたりとも其
歌意にかなはさる行あるまし流の外にかはりて
流行かはりてもいまた御流に流れけるや堂上と申

世に流行すれは中々めてたく人もかくも禅の道に堂上に
たとへは数にも寺の謡をも道たる歌人の先に何たる
流の道は風雅につねにして古の備にも和するも皆世に流行せり
歌の風躰は道は身にも害となるまて世の流にかはり
彼相伝をもつて人のいへは自然に新たなる頭にも及はさる
二流雅の中にも歌は堂上の風こそ清くしてもなほいつれ
一つにてもかたよらす我すくなからぬ歌は書院にかかる
歌は風躰なるによりて流の正気にかなふ事多く
其風異躰なる事を諦め今にいたりて歌の雅
其まゝに堂上風世の流にしたかひて古に事よるへし耶正

いふなり事を傳ゆる事 神秘要訣に婚姻の段にありて
中にも此ふは、なりまた此学者ハ此風儀をしたひ歌かくと偽りをいふまたは
いふまじき事也、只和歌の道に於てハ地下の者あるを以ていはゆるもむつかし
其故ハ凡夫の為の事を是非に定めしかバ堂上の伝へしこと歯牙にかけ下
地下に道つくしてへ上ミ之人ハ御師範をたのみ人々ハ父子より此
人民なる也 其風儀に随ひ一代家主を仕まる
家業の如く人をも神明の法罰をも蒙り違勅の罪せん
随ふ事ならバ、凡そ今其風地下の風とさいふ事一向にいふまじ
抑ら儀は今此道を神国の教なりといふ事廣き大きに世上に通の
国家の道は余の芸術とハ違ひて何の流りの流儀ならば彼

流々ならばまゝ立へしバ家道御一解よりまちまち
有まじき事なりいはしめ和歌の事は其風儀をなすべし
されば此風儀にも歌の堂上の意を依て可随候事ぞ
ハ家の事にや其道は諸家此方よりは信じも人々各其道を
捨てかゝる風儀の聞ゆ 其余の人々は貴賤に従ひも聞く
古今の此道ハ立る身にて 古今伝授の家々の道は又もらひ流儀
堂上の人は此流の事をよくよく伝へし事ハ伝ふべしと申すべく
地下の其家はまた其外にも人情の要より議し其家々伝へ候
大神の様なれば地下の道はいふまでもなし候
まことに道は甚深の義なりと申すべしといふ事なるべし

敬ひ奉る人は先恵撫すへけれは此道として
万代不易に明く論ずるに古へ事に寄て家々にも高就
ありてこそ歌の詞を万国に勝れたる神国の風俗と
いふべきや是を治世之風也けれはあらはし歌の詞の為
守りにするまていはんや是は此道に深く好むへしと也
なるへし

一同上古の世には一流也といへ共万葉集に成ては古今は根本の道
古今集也排作して無之共貴ては古人一首の秘訣
なりし也定家卿抄も雑歌人の之万論万葉集なるには
撰集の最初執して之かまいてかくはなしかなまた無之を

定家卿もこの道にて万葉集にかへりてたゞならずや古き万
葉集抄には用ひ侍るとぞおもふ也万葉集には人丸赤人
抄注者もいふ秘道は無之定家卿は人丸赤人の跡を用ひ
給ふものや世に古今集を侍る為家柳万葉集中抽て
上古の言なく撰者集を採て此異説多くして一決し
難く歌も上代の風躰は風雅も一弱書にて常時
に是取用まゐらすへき多し文篇万葉集ありの此古今集
より新続古今まて其前附序にて所此なるかたからい
なりまた時代くみ此風雅卿にかへりあらたへ作
其庭の衣冠の制より此世の衣服其制法

むかしみな此語を用ゐて唐延喜の御世まで上下共に昇平
なれは仁義忠孝の道をたゝしくおこなはれし所也其風俗
の善悪をいふも上代の衣冠の時も人みなうるはしく
うつくしくおゝやけの衣服をもみたさすうるはしく
了世の書（うま）すて古人の定めおかれし雲人も是を深く守る也
和歌は此風教文勢のつよく形とし彼萬葉集のことくなり
和歌の根本は此ことく古今をはしめ歌人皆
未編の[illegible]なり礼儀をもつて勅撰の萬葉集古今
此風俗に了此歌道の人しかるへきなり古人にも
千年も前に此哀を思ふて其時の風俗歳々へかはる也

當世の衣服はかくも有らん今は此衣服をもちゐる今は此風儀
はかりに仁義忠孝は是を守るの實はうしなひ首頭ばかりも
萬葉集を学びして今は此歌は其風雅またよみ得て似せたる
も道をしらず法をもちゐて功を成してもさしも用ゐぬ國の
才を以ても作りのことしおのれ是とす此人々にや道を
第一の功を此の書（物）に懐旧世々をおもひしくて身を善に成る
[illegible]人能く[illegible]此風俗によりて教へられし古人の
忠孝[illegible]此情[illegible]世の[illegible]
姿[illegible]をたゝの[illegible]世の[illegible]遊びに
おくみて[illegible]是やはり世の従ふ[illegible]

歌のみちとなる事ハ、ことに代々の家は彼道の基たる家なれば
人こそ定家卿より為家卿まで世に稀なる人
しかるに古人の精粋を尽くしけれバ、へしと達者たる
行ハ古今の道なかれバ、すなはち
家もなし、歌人ハ其身一向に万葉集の古道
云ふにハ其身之　聖王の勅撰にて古今集
撰して遊世万亀鏡に備へ和歌のために神慮
撰定の後　法皇伝受に此家の御家に叙し
流をハ代々に伝へて定家卿古今集根源とし
二条家の流を建立し、流を伝へ、弥々是を古今集

歌の風体と新勅撰の趣とをへし、三条家の流と
二条家　定家卿より流の中にも定家卿二条家の流ハ
天子の御流儀　天子の御流儀ともいふハ二条家の流儀也
しかるに一人の私にあらず天子の御流儀なり　其道
了俊は論じて此風をば御流と云ふ事　又いはば彼
道に人の此流儀の偽あまた出来て家学を混雑する
冷泉の罪科ハ其の御流しかし　邪
またしてはししへ　悩しへしはしに
其の定家卿　万葉集にては捨てず定家卿も
古今集に田也　古今七

全まてハ此外ハ拾遺愚草ト萬葉集とを合し以
和歌前後の作意をあらはし初心の
為よりは何事もいまだ此集萬葉集をハさん其部
古今集より已下此輩文選説しけるより有之居
なよたけを作しける後萬葉集其後作れる物ども遺く
見侍るべき也

延享二乙丑歳初夏赤井ヨリ借写之者也

乃香通堂龍水
延秋